栄浦大橋（常呂漁港）

■栄浦地区と対岸のワッカ地区を結ぶ大きな橋で、昭和６３年１０月１３日に渡橋式が行われました。
＊最後のページに「広報ところ」（昭和６３年１１月号）を添付しています
栄浦大橋の概要と渡橋式のようすが分かります

＊栄浦漁港から対岸へつづく橋

＊対岸のワッカ地区から見た端

＊橋の上からワッカ地区を見て：右奥にワッカネイチャーセンター

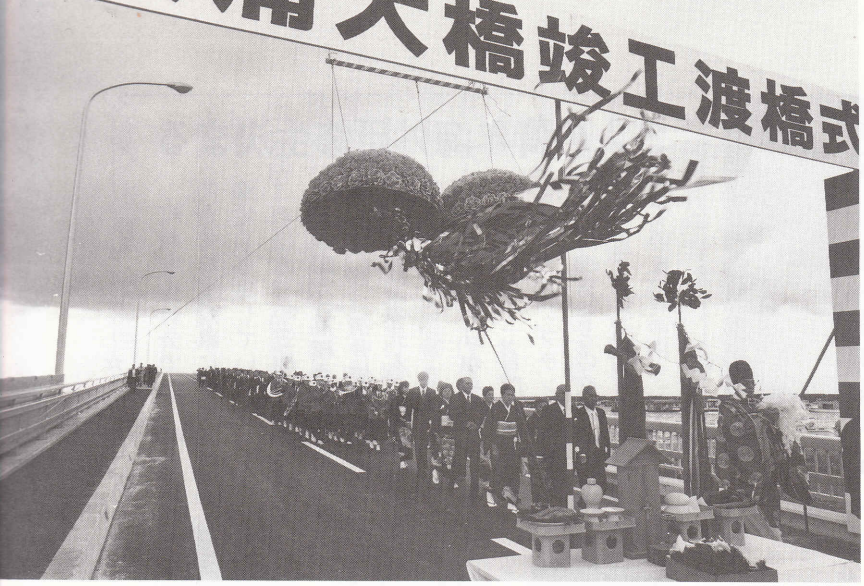
＊橋の上から栄浦地区を見て

＊橋の上から鐺沸地区の方を見て

＊橋の上からワッカ地区の漁船を見て：奥にワッカネイチャーセンター

＊橋の上から鶴雅リゾート方面を見て

＊橋の上から栄浦漁港の入口を見て



栄浦とワッカを結ぶ
栄浦大橋が開通

漁業と観光の両面の発展が期待され建設を進めてきた、栄浦大橋が完成し、十月十三日に漁業関係者など約二百人が渡橋式を行い橋の完成を祝いました。

栄浦大橋は、栄浦漁港と対岸のワッカ地区にあるホタテ養殖作業場を最短距離で結び、作業の効率をあげる目的で、北海道が昭和五十七年から建設を進めていました。

全長二百八十六メートルは、漁港内の架橋としては全道一、全国でも三番目の長大橋というものです。

これまで、栄浦地区からワッカ地区までは、サロマ湖畔を回って約十五キロ、約三十分かかった道のりが、二百八十六メートルの橋で直結され、水産物などの運搬作業時間が大幅に短縮されるなど、新たなホタテ養殖基地としての発展が期待されます。

この日のしゅん工渡橋式では、小笠原敬漁協組合長などによるテープカットのあと、町内親子三世代を代表して、橋本藤太郎さん、諸岡重一さん一家を先頭に約二百人が渡り初めを行い橋の開通を祝いました。

マラソン瀬古選手
合宿の思い出「手形」を残す

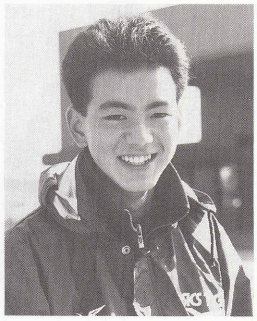
ソウルオリンピックのマラソンに出場した日本代表の瀬古利彦選手が10月7日、家族らといっしょに常呂町を訪れ、来町記念に手形をとりました。

瀬古選手が毎年、合宿に訪れていたのは、同選手を育てた故中村清監督と友人だった新谷裕彦さん（57歳・弁天）のお世話で、早稲田大学時代から10年間も続いています。

この日は、オリンピックから帰って間もない瀬古選手と奥さんの美恵（よしえ）さん、長男の昂（すばる）君、SB食品の小林スポーツ推進局長の4人が訪れ、新谷さんや合宿中に世話役を努めた人達に会ってお礼のあいさつ。

「これまでのマラソン人生の中で思い出深いレースができました。今後は、SB軍団で後輩たちの指導をしています。これからも常呂合宿の時はよろしくお願いします」と今回で現役を引退することを明らかにしました。

9日には、親子3人で手工芸の館に立ち寄り手形をおさめ、常呂での思い出を残していきました。



常呂高2年

佐藤文彦さん
陸上新人戦で全道第3位

九月三十日から三日間、札幌市で開かれた「第四回北海道高等学校新人陸上競技大会」に出場した佐藤文彦さん（17歳・豊川）が、三千メートル障害で全道三位に入賞しました。

今シーズン行われた全道高等学校陸上競技大会の五千メートルでは、全道七位と、全国出場の六位まで、あと一歩だっただけに「入賞できるとは思わなかったけれど、練習の成果が出てうれしい」と喜びもひとしおです。